Fate/Kaleid caster ドラまた☆リナ外伝・星を紡ぐ武器を求める者

猿野ただすみ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

拙作【Ｆａｔｅ／Ｋａｌｅｉｄ　ｃａｓｔｅｒ　ドラまた☆リナ】のゲストキャラ、星見ミリィと青川慧のお話。

もし、[スィーフィード世界]だけでなく、[ヴォルフィード世界]も接触してきていたら？

もし、この世界に魔王の武器が流れ着いていたら？

※この作品はロスユニ要素がありますが、舞台となる世界はあくまでプリズマ☆イリヤです。

また、ミリィや慧はこちらの世界におけるミレニアム＝フェリア＝ノクターンとケイン＝ブルーリバーですが、原作とはだいぶ変質（笑）しているので、一応オリ主タグを貼りました。

目次

遭遇 ―― 1
天使の映し身 ―― 11
奇襲 ―― 21

遭遇

私立穂群原学園初等部。調理実習も終わりに差し迫った頃。

「出来た！」

一切れのパウンドケーキ。それを食品用フィルムの袋に入れ、その口を何度もリボンを結び直しながら、ようやく納得がいった形で閉じ、ふう、と一息吐く金髪の少女。

名前は星見ミリィ。

「随分と熱心だったわねー」

そう言ったのは、今回同じ班でパウンドケーキを作った稲葉リナ。時々大人っぽい発言をする、少しだけミステリアスな赤毛の少女だ。またの名を、「身体は子供、心は魔王」の稲葉リナ。ただし怒らせなければ、ごく普通の元気な女の子だ。

「そんなに青川くんに食べてもらいたいの？」

「そうよ、悪い？」

リナがからかうように言うと、頬を染め、怒った表情でミリィは言い返した。

「何よ、つまんない反応ねー」

「さっき散々からかっといて、よく言うわね」

実はリナ、パウンドケーキ制作中に、ミリィと青川慧との関係について散々からかったのだ。

ミリィにとって、はとこに当たる慧は気になる存在。純粋に親族としてなのか、それとも恋愛感情なのかはわからないが、もっと近くにありたい。そう思える存在だ。

「……あー、ごめん。ちょっと行き過ぎだったか」

リナが謝ると、ミリィは嘆息し言った。

「もう、いいよ。おかげで踏ん切りがついたっていうのもあるしね」

最初、パウンドケーキを作り始めたときはどうするか迷っていたミリィ。しかし、リナのおかげで吹っ切ることが出来たのだ。結果論ではあるが。

「……ところでリナも、そのパウンドケーキ、誰かにあげるの？」

リナの手には、綺麗に包装されたパウンドケーキがある。
「ああ、これは士郎さん…、イリヤのにーちゃんにね。料理教えてもらってるお礼よ」
イリヤは本名、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンという銀髪に赤い瞳のハーフの少女だ。最近は従妹のクロエ・フォン・アインツベルンという子も転入してきて、クラスはさらに賑やかになっていた。
「ふうん…」
ミリィはリナの包装を見てから、自分が包装した物へと視線を移し。
はあ…
大きくため息を吐くのだった。

放課後。ミリィは、慧がいる3組の前までやって来た。とはいえ、これは別段変わった行動ではなく、先にホームルームが終わった方が終わらない方のクラスに赴き、一緒に下校するという一連の流れである。
これでまことしやかな噂が流れないはずはない。ないのだが、それに気づかないこのふたりは相当鈍感か、危機管理能力が欠如してるかのどちらかなのか。
「よっ、お待たせ」
教室の中から赤毛の少年が現れる。青川慧だ。
「さあ、帰ろうぜ。ばーちゃんとの稽古もあるしな」
慧は祖母アリシアから剣術を学んでいた。
それは別にいい。ミリィも祖父の妹、大叔母に当たるアリシアのことは好きだ。しかし慧のそれはただのお祖母ちゃんっ子というレベルではなく、グランドマザー・コンプレックスと呼ぶに相応しいもので、ミリィも少しヤキモチを焼くほどだ。
「何だ、ミリィ。何不貞腐れてんだ?」
「別に!」

ミリィはぷいっとそっぽを向く。そんな様子に思案顔になる慧だった。

いつもの帰り道。いつものごとく、ショートカットするために公園の中を歩いて行くふたり。

「……ねえ、慧」

ミリィが慧を呼び止める。

「どうしたミリィ。……トイレか？」

「なっ!? 何デリカシーの無いこと言ってんのよ！」

「わっ、待てミリィ、冗談だ！ あまりにも真剣な表情をしてたから、和ませようとしただけだって！」

鬼のような形相でワナワナと震えるミリィに、慌てて言い訳をする慧だが、冗談にしてもデリカシーが無いのは間違いない。

「まったくもう…。雰囲気なんてあったもんじゃない…。

……はい！」

ミリィは鞄から出した物を、慧に投げて渡す。

「うわっと…。これは、パウンドケーキか？」

「それ以外の何だっての。

今日の調理実習で作ったのよ。慧にもあげる」

「そうか。サンキューな」

突っ慳貪な態度のミリィに、慧はお礼を言う。ミリィはそっぽを向いたままだが、耳が赤くなってたりする。慧は気づいてないが。

「ところで、また鍋を爆発させたり、電子レンジを黒焦げにしたりしてないだろうな？」

「そんなことしてないわよ」

慧の疑問をハッキリと否定するが、実はおたまを一つ使用不能にしている。まあ、嘘は言ってないのだが…。

「ならいいんだけど…。

まあ、ミリィの料理が美味いのは確かだし、これはありがたく頂くよ」

そう言ってニカッと笑う慧を見て、ミリィは少し、心がホワッとする気がした。
「さ、行こうぜ」
慧が促して一歩踏み出した瞬間。ふたりに得も言われぬイヤな予感が走る。
咄嗟に飛び退くふたり。
次の瞬間には、ふたりが立っていた場所から黒い何かが噴き上がる。
「な…に?」
「何が起きてんだ!?」
ふたりが呟くと。黒い何かの中心から、真っ黒な身体に顔だけが美形な青年の、ナニモノかが現れた。
「随分と勘の鋭い人間ですね」
ソレはニタァと笑いながら言った。背筋が凍る思いがするふたり。それでも慧は、そいつに言葉をぶつける。
「お前は、何だ? 俺たちに、何をしようとしたんだ!?」
「私が何者かなど、どうでもいいでしょう?
何をしようとしたのかと問われれば、食事、でしょうね」
「食事? ……まさか!?」
ふたりは、その想像に戦慄する。するとソレは、その笑みをさらに深くする。
「そうですね。貴方方のその四肢を引き裂き、苦痛に歪むその表情を見ながらの食事というのも、なかなかに乙なものでしょう」
ソレの言葉によって、ふたりは恐怖に支配されていく。
(せめて、ミリィだけでも…!)
そうは思うものの、慧自身が恐怖によって言葉すら発せられない状態である。
「さあ、どちらが先に…」
ソレが一歩、踏み出そうとしたその時。
カッ!
地面に突き刺さる、柄の短い剣。その剣はソレがいた場所を通り過

ぎ突き刺さったもの。そう、いた場所を。
ソレは一瞬にして姿を消し、剣を躱していた。
突き刺さった剣は、ふっと刃が消え柄の部分が落下し、カランと音を立てる。
『やれやれ、不意討ちとは美しくないやり方ですね』
姿を消したままソレが言うと、植え込みの木の後ろから長い銀髪の可愛らしい、ふたりと同い年くらいの少女が姿を現した。
（……イリヤ？）
ミリィは一瞬、クラスメイトのイリヤと見間違えたが、瞳は赤くないし、何より顔だちは東洋人寄りだ。イリヤが西洋人形だとすれば、彼女は銀髪の日本人形。そんな感じである。
「不意を突いてそちらのふたりを襲うあなたに、言われたくはありません」
少女は、先程までソレがいたところを見つめながら言った。
「それにあなたの言う食事とは、生命が放つ負の感情のことでしょう？」
『貴女は、何者ですか？』
姿を現しながら、ソレが尋ねる。
「私の名は［キャナル］！　この身体を依り代として、この世界に舞い降りた者!!」
「まさか、［ヴォルフィード］の手のものですか！」
少女の名乗りに驚愕の色を浮かべるソレ。
少女は、羽織っていた夏物のジャケットから拳銃を取り出し発砲する。
パシュッ！　パシュッ！
その軽い音からもわかるように、彼女…、キャナルが扱うのはＢＢ弾式のエアガン。一見巫山戯ているように見えるが、その内の一発がソレの腕に当たると。
ばじゅ！
「!?」
いやな音を立て、その部分から煙のようなものが立ち上がる。

「……発射管の内側に魔術処理を施して、弾に聖属性の加護が付加されるようにしてあります。
あなたたちには、痛いでは済まされないでしょう？」
そう言いながら、銃を構えるキャナル。しかしソレは、にたりと笑う。
「……そうですね。確かに思った以上のダメージを受けてはいます。
しかし数発程度なら問題ありませんし、何より、ここから動かなかった私に何度も撃ち込んで、実際に当たったのはたったの一発。
貴女にその武器は合っていないようですが…？」
「～～～！」
キャナルは悔しそうな表情になる。
「それに…」
ソレはスッと消えたかと思うと、次の瞬間にはミリィの後ろに現れ、彼女の頭に左手を乗せる。ミリィは恐怖のあまり青ざめ、その身を震わせる。
「こうすれば貴女も、下手に手出しは出来ないでしょう？」
「くぅっ…！」
人質を取られ、自分の不甲斐なさに奥歯を噛みしめるキャナル。
「いいですね。この人間の恐怖の感情。そして貴女が感じている慚愧の念。それと…」
「ミリィから離れろォ！」
慧はミリィを助けんと、ソレに向かって体当たりをしようとするも、右手の一振りであっさりと吹き飛ばされてしまう。
「この怒りの感情。大変美味ですね」
ソレがまた、にたりと笑う。
「くそっ…！」
慧が手をつき身を起こす。
コツリと、指先に何かが当たる。
「ミリィから…」
慧はそれを掴みながら立ち上がり。
「離れろって…」

ソレに向かって駆け出し。
「言ってんだろぉっ!!」
叫んだ瞬間、手に掴んだそれ…、剣の柄から刃が形成される。
「何!?」
ソレは驚き一歩下がるが、慧が振り抜いた剣がソレの左腕を切り落とす。切り落とされた腕は、黒い霞となって空間に溶けていった。
一方ソレの左腕は、瞬く間に再生されていく。
「大丈夫か、ミリィ!?」
「う、うん…」
駆け寄り声をかけた慧に、ミリィは小さく頷いた。
「……おのれ」
「!?」
その小さな呟きに、ふたりはソレを見る。
「……おのれ、おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ!!」
怒りの隠った眼差しで慧を見つめながら、呪詛のように同じ言葉を繰り返す。
「……死ね」
右手に魔力の塊を生成するソレ。しかし。
「させませんっ!」
キャナルは右手に、変わった飾りが両端に付いた棒状のものを取りだし駆けだした。
「!? それは…!!」
「光よっ!」
キャナルのかけ声と共に、棒…、柄の先端に光の刃が現れる。キャナルは剣をソレに向かって振り抜くが、今度は大きく後ろに飛び退いて躱した。
「……どうやらレプリカの様ですが、さすがにそれに斬られるのは不味いですね。
仕方がありません。ここは引かせてもらいましょう」
そう言ってソレは、空間に溶け込むようにスウッと消えていった。

「……どうやら、本当に引いていったようですね」
キャナルは呟き、ふぅ、と息を吐く。
「あんた、一体…」
「私は…」
慧の洩らした言葉に応えようとするも、キャナルは急に膝をつく。
「おい、あんた、大丈夫か!?」
慧が慌てて駆け寄ろうとするが、キャナルは右手を突き出し静止をかける。
「連日の捜索の無理が祟った様です。まさか、これを起動するだけでこの様になるほど、力を消費しているとは思いもしませんでしたが…」
「捜索？　あんた、一体何を…」
「済みませんが、表に出ていられるのも限界です。後は神名(かな)に聞いて下さい…」
それだけ言うと、キャナルは頭(こうべ)を垂れる。そして。
「髪の毛が黒く…」
ミリィが小さく呟いた。
彼女が言うとおり、キャナルの銀色の髪の毛が黒く染まっていく。
やがて、髪の全てが黒く染まり、再び彼女は面(おもて)を上げる。その表情は先程までの気の強さを滲ませたものではなく、年相応のあどけないものだった。
「……あんたは？」
慧が再び尋ねると、少女はニッコリと微笑む。
「わたしは、黒神神名(くろかみかな)っていいます」
少女…、神名の自己紹介に、ミリィは少し首を傾げ。
「黒髪？」
と言うその発言に、今度は神名が首を傾げ、やがて言ってる意味に気づきクスリと笑う。
「黒神は髪の毛の髪じゃなくって、神様の神だよ」
それを聞き、ああと頷くミリィ。
「腹五社神社(はらごしゃ)の埋没鳥居がある、あの黒神ね」

「……え？　腹五社神社、知ってるの？
　私は苗字の関係で知ってたけど…」
「お前、神社仏閣なんて詳しかったか？」
　以外な知識の出所に驚くふたり。
「違う違う。今、お祖父様が神社仏閣の参拝にはまってて、この間九州を巡った内のひとつがそこだったのよ。神社も地名も変わってたから、それで覚えてただけ」
　ゲイザーコンツェルンの会長、渋い趣味である。ちなみに会社名は、ミリィの祖父が日本に帰化する前の名前、アルバート＝ヴァン＝スターゲイザーから取られている。現在は星見貴光という日本名を名乗っているが。
　閑話休題。
「そうだったんだ。
　……あの、それでふたりは誰ですか？」
　言われてふたりはハッとする。
「すまん、自己紹介がまだだったな。
　オレは青川慧。穂群原学園初等部の５年生だ。
　さっきは助けてくれて、ありがとな」
「わたしは星見ミリィ。同じく穂群原学園初等部の５年生。慧とははとこ同士で幼馴染みよ。
　あなたのおかげで、ふたりとも無事でいられたわ。ありがとう」
　ふたりの自己紹介とお礼に、しかし神名は表情を曇らせる。
「わたしは、何もやってないよ。ふたりを助けたのは、キャナルだから」
「え…？」
　神名の、自虐的なニュアンスを含んだ発言に、ミリィはどう言葉をかけたらいいのかわからずに戸惑ってしまう。すると。
「んなこたぁ知るか！」
「ちょっと、慧!?」
　いきなりの暴言に、思わず非難の声を上げそうになるミリィ。だが。

「オレたちは、まだ何にも聞かされちゃいねぇ。そんな状況で、『わたしは何もしてません』って言われて、『ああ、そうですね』なんて言えるわきゃねーだろ！」
　そのとおりだった。神名の言い分は、彼女の中での自己完結でしかない。
「[キャナル]…、だったか？　アイツが言ってたとおり、まずは説明してくれ」
「でも…」
　何かを言おうとする神名の、その言葉を遮って慧が言う。
「言っとくが、『巻き込みたくない』てのは無しだかんな。オレたちは充分に巻き込まれてるし、何よりオレが首を突っ込みたいんだからな」
「わたしもだよ！」
　ミリィも激しく同意する。あんな怖い目にあったというのに、芯のとても強い子である。
　自分の気の弱さを知っている神名としては、二人が見せるそんな強さもコンプレックスなのだが、同時に憧れでもある。だからこそ、神名の中にはキャナルがいるのだが。
「……わかった。それじゃあ話すよ。わたしとキャナルのこと」
　神名は、決意を込めた表情で二人に言った。

天使の映し身

穂群原学園初等部。星見ミリィは教室の席で物思いに耽っていた。それは勿論、昨日の出来事についてだ。

自分と青川慧を襲った、謎の存在。そんな二人を助けてくれた少女。ハッキリ言って現実的ではない出来事であったが、幸か不幸かそれを証明する物を、ミリィは所持していた。

ミリィの学校指定の鞄の中には、助けてくれた少女が使用していた、アレにダメージを与えることが出来るエアガンが入っている。護身用にと持たせてくれたのだ。

ミリィは少女の、黒神神名の説明を思い出していた。

神名は決意の表情を浮かべ言った。

「わかった。それじゃあ話すよ。わたしとキャナルのこと」

それを感じ取ったミリィと慧も、真剣な面持ちで頷く。

「わたしは、民間陰陽道黒神流の家に生まれたんだ」

「民間、おんみょうどう…」

「……って何だ？」

二人が首を傾げる。だが神名はこういう反応を予想していたために、別段気にする様子もなく説明をした。

「陰陽道は、古い時代からある学問だよ。中国発祥の陰陽説と五行思想を組み合わせたもので、地学、気象学、天文学、……そういったものを組み込んだ総合学なんだ」

妖怪退治、悪霊退治モノに登場する陰陽師のイメージで勘違いされやすいが、陰陽道とは本来、立派な学問である。また陰陽師は、宮中の陰陽寮に所属する役人でもあったのだ。

「それで当時のその学問の中には、今で言う占いやお祓いなんかも含まれてたの。本来それは、宮中の帝や貴族のために行われてたものなんだけど、江戸時代くらいに民間へと技術の一部、特に占いやお祓いといったものが流出したんだよ」

「つまり黒神流ってのは、その民間に流れた技術を継承している内のひとつって事か」
「うん」
　短く肯定して頷く神名。
「わたしの家は所謂祓い師なんだ。お父さんもお兄ちゃん達も、立派な陰陽師。だけどわたしは、陰陽の技術（わざ）が上手に使えない。わたしにはお祓いなんて出来なかった。だから、わたしだけ家に残されるのなんていつものことだった。
　……だけどそんなある日、いつものように家にひとりでいたとき、それは起きたの」
　その時、今まで沈んだ表情だった神名に、笑みが浮かぶ。
「わたしが修練場でひとり術の練習をしていたら、突然目の前が輝きだして、白い翼を生やした女の人が現れたんだ」
「翼を生やした!?」
「それってまるで、天使じゃない！」
　ミリィの言葉に、神名は笑顔になる。
「うん、言ってたよ。『私は天使キャナル』って。
　キャナルは異世界の神様に遣える天使で、魔王を倒すための武器を回収するために来たんだって」
「魔王を倒す武器…」
　やっぱり男の子、「魔王を倒す武器」などという、先程の状況がなければただの胡散臭い話に、好奇心を滲ませた表情で呟く慧。一方のミリィは、当然男のロマンなどわかるはずもなく、ただ疑問に思ったことを神名に尋ねる。
「ねえ、どうしてそんな異世界の武器がこの世界にあるのよ？」
「うん…、キャナルの説明だと…」
　前置きをして神名は語り始めた。
「キャナルがいる世界では、漆黒の竜神（ナイト・ドラゴン）［ヴォルフィード］と闇を撒く（ダーク・スター）もの［デュグラディグドゥ］が戦っていたんだって。
闇を撒く（ダーク・スター）ものが望むのは、自分達を含めた統べての存在（もの）を虚無へと還すこと。漆黒の竜神（ナイト・ドラゴン）の望みは世界の存続。

その戦いは、闇を撒くものの勝利で決着が着いた、はずだった。だけど闇を撒くものは暴走して、自分を滅ぼせる力を秘めた五つの武器、[瞬撃槍][毒牙爪][烈光の剣][破神槌][颶風弓]を作って、様々な世界にばら撒いたんだって」
「そのひとつが、この世界に？」
「うん」
ミリィの疑問とも確認ともつかない言葉に頷いてから、神名は握ったままの棒、光の刃を生み出した剣の柄を二人に見せる。
「これもその武器のひとつ、[烈光の剣]だよ。レプリカだけど」
「レプリカ？　そういやさっきのヤツも、そんなこと言ってたな」
慧は先程、神名…、いや、キャナルがアレに斬りかかっていったときのことを思い出しながら言った。
「本物は、キャナルが持ってるから」
「？　キャナルがって、どういうことだ？」
「キャナルはあなたの前に現れたんだよね？」
「……話が、逸れちゃったね」
そう言うと、一つだけ、ただし深く息を吐いて、神名は話を続けた。
「わたしの前に現れたキャナルは、精神だけの分身みたいなものなんだ」
「分身？」
聞き返す慧に、神名は頷く。
「こっちの、魔術の世界の常識では、昔の英雄が死後、英霊として座に至るらしいんだけど、その英霊の魂が分身として召喚されたりするんだって。それを説明して聞いてみたら、それに似たものだって言ってたよ。向こうのキャナルは生きてるみたいだけど」
「な、なるほど？」
「ちょっと難しいけど、なんとか理解したわ」
頭を抱えながら応える二人。名誉のために記すが、二人とも学校の成績はそれなりに良い。ただしあくまで小学生。思考も、知識も。どこその、サブカルチャーに精通した銀髪ハーフの様にはいかないのだ。

因みに英霊の座には時間の概念がないので、必ずしも昔とは限らないのだが、ここでの説明においてはなんの問題もないことである。
「キャナルの分身は、本体が持つ［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］の、そのレプリカを持ってこっちに来たんだ。闇（ダーク・スター）を撒くものの部下、魔族も同じくこっちに来てる可能性があったから。……でも」
「でも？」
聞き返す慧。
「精神だけの状態だと、物質世界ではその存在をいつまでも保ってられないんだって。だから何か依り代が必要だったんだ。
……だから、わたしの身体を貸してあげたの」
「つまり、あなたの身体の中に［キャナル］がいるって事？」
「うん」
神名はこくりと頷いた。
（……寄生虫？）
かなり失礼なことを思う慧。そんな事は露とも知らず、神名は話を続ける。
「それに対して魔族は精神生命体で、精神世界面に実体があるから、ある程度の力がある魔族は物質世界でも存在を保ってられるんだって」
言ってしまえば、魔族は自力で第三魔法・魂の物質化が出来てしまうのだ。
「そんな魔族を攻撃するには、精神に直接ダメージを与えるしかないんだ。それが出来るのが、青川くんが今持ってる黒鍵とこのエアガン、そして［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］のレプリカだよ」
「ああ、そうだ。エアガンと［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］の説明は聞いたけど、こいつについては聞いてなかったな。それで、こいつは一体なんだ？」
慧は手に持ったそれを、ゆらゆらと振りながら尋ねる。
「それは黒鍵って言って、聖堂教会の代行者、……教義に大きく反する存在を始末する人達が好んで使う武器だよ」
「……なんか今、物凄く物騒な言葉が聞こえた気がするんだけど」
「言うなミリィ。俺も思ったけど、ここは聞き流すんだ」
少なくとも、そっち方面に深入りしないのは正解である。

「えっと、黒鍵に魔力を込めると刃が出来るんだけど、キャナルが黒鍵を改良して、精神力で刃が出来るようにしたんだ。［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］のレプリカを造ったときの応用だって」
「なんか天使って凄いわね」
「と言うより、異世界技術がすげぇ」
　どこぞの異世界転生者も黒鍵を改良していたので、慧の意見もあながち間違ってはいない。
「キャナルは、［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］と改造した黒鍵、エアガンを持って、毎日この冬木市で闇（ダーク・スター）を撒くものの武器を探してて、そして今日、あの魔族とあなた達ふたりに会ったんだ」
「そうだったんだ」
　紆余曲折しながらの説明に、ミリィはようやく、納得したと頷いた。
「だから、わたしは…」
「ああ、やっぱり黒神のお陰だな！」
「……え？」
　慧の力強い言葉に、神名は驚き、目をしばたかせる。
「だって、黒神がキャナルに身体を貸してやったから、キャナルは存在していられるんだろ？　そしてそのお陰で俺達は、あの魔族から助けられたんだ」
「そうね。確かに助けてくれたのは、キャナルかも知れない。でも、そのキャナルを助けてるのは黒神さんよ？　だからやっぱり、黒神さんのお陰でもあるわ」
「あ…」
　ふたりがかけてくれた言葉に、神名は感極まり泣き出してしまうのだった。

　その後別れ際に、護身用にと慧に黒鍵、ミリィにエアガンを渡されて今に至っている。
（魔族に、魔王の武器かぁ…）
　未だに信じ難いものの、魔族の手が自分の頭の上に置かれた感触

は、今でもはっきりと憶えている。
「どうしたの、ミリィ。難しい顔して。愛しの青川くんにフラれちゃった？」
物思いに耽るミリィに、リナが声をかけた。しっかり弄ってくることを忘れない辺りがリナらしい。
「別にそんなんじゃないわよ。リナこそイリヤのお兄さんとは上手くいってるの？」
別に何か知っているわけでもなく、ただ、言われっぱなしが嫌だったので、たまに話に挙がるイリヤの兄を引き合いに出しただけだった。
「……は？　なんでそこで士郎さんが出てくんの？」
妙な間を開けて聞き返すリナ。頭と口が回るリナらしからぬ、微妙な間。しかし浮かべているその表情は、本当に心当たりがない様にしか見えない。
（あれ？　もしかして、本当に…？　しかもリナ自身は自覚してない？）
思わずニンマリと笑うミリィ。
「ちょっと、どうしたのよミリィ!?」
「んーん、別にぃ？」
からかいポイント発見、と内心でガッツポーズしているミリィだった。

放課後。慧とともに校門に差しかかると、そこには。
「青川くん、星見さん」
「「黒神」さん」
神名が門柱に背を預けて待ち構えていた。その衣装は、穂群原小の制服姿である。
「……当たり前っちゃ当たり前だけど、やっぱり穂群原小の生徒だったんだな」
慧の問いに、こくりと頷く神名。

「改めまして、穂群原小学校5年2組の黒神神名です」
改めての自己紹介をし、ぺこりとお辞儀をする。
「……それで黒神さん、何か用事なの？」
ミリィが尋ねると、神名は再び頷き返す。
「キャナルが、しばらくの間は家の中でも、武器を肌身離さず携帯するようにって。魔ぞ…、アレは空間を渡って、どこにでも現れるから」
そう注意を促され、思わず自分の鞄に意識が行くふたり。
「うん。わかっ…」
そしてミリィが応えきる前に。
「あら、ミリィじゃない」
後ろから声をかけられ振り向くと、そこには三人の少女がいた。
「クロ、イリヤ、美遊…」
横文字苗字の三人だ。声をかけたのはクロこと、クロエ・フォン・アインツベルンだった。
「ミリィはアオガワくんと下校イベント中？」
イリヤこと、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがニヤニヤしながら尋ねる。どうやら昨日リナが言っていた「クラスのみんなには筒抜け」と言うのも、あながち間違ってはいないみたいだ。もっとも、ミリィは別に慧と付き合ってるわけではない。将来的にはわからないが。
「イリヤ、下校イベントって何？」
美遊・エーデルフェルトの疑問に、イリヤは有りもしない眼鏡をくいっと上げる仕草をして説明を始めた。
「下校イベントとは、男女ふたりで帰宅すること。それはギャルゲーにおける、お互いの仲を親密なものにするための、重要なイベントのひとつ。
①下校イベント!!
②連絡先の交換!!
③デート!!
④女子からの下校イベント!!
⑤　③④の繰り返し!!

こうやって恋愛は高まっていくものなの!!　ゲームでは!!」
「あなたはどこの落とし神よ？」
　呆れ顔でツッコミを入れるクロエ。
「大体、連絡先の交換も何も、わたしと慧は親戚なんだから、元から連絡先知ってるし。二番目で破綻してるわよ」
　ミリィ自身も冷静に突っ込む。と、そこへ。
「あの、青川くんと星見さんって、お付き合いしてるの？」
　神名が興味半分、驚き半分で尋ねてきた。
「いや、親戚同士で仲が良いから、周りがそんな事言ってくるだけだって」
「ホント。なんでみんな、くっつけたがるのかしら？」
　と言いつつも、あっけらかんと答えた慧にモヤモヤを募らせるミリィである。
「……それじゃ、わたしでも」
　ぼそりと呟く神名。若干意識が内にいっていた為に聞き逃したミリィだが、耳聡い銀髪擬似姉妹は聞き逃さなかった。
「ところで、貴女はどちらさんかしら？」
「アオガワくんのお友達？」
　神名に詰め寄るクロエとイリヤ。ミリィではなく、慧の名前を出す辺りがミソである。あからさまでもあるが。
　その勢いに押されて、神名は門柱にピッタリと背中を預ける。
「あ、あの、わたし、黒神神名って…、!?」
「ええっ!?『黒神』って、黒神めだかと同じ『黒神』!?」
「え、黒神めだかって…？」
　イリヤのオタク発言大爆発である。残念ながら神名は、【めだかボックス】を知らなかったみたいだが。
「ほら、ふたりとも。黒神さんはちょっと内気だから、あまり捲したてないで」
　見かねたミリィが止めに入ると、ふたりは「ちぇーっ」と言いながらも引き下がる。
「美遊、ふたりの監視、お願い」

「わかった」
「「美遊ううう!?」」
美遊の対応にショックを受けるイリクロだった。

じゃあ、と三人が去っていった、その後。
「あの、青川くん、星見さん、ちょっと…」
神名は声をかけて歩き出す。ふたりは訳もわからず着いていくと、昨日の公園までやってきた。
神名は辺りを見渡し、他に誰もいないのを確認すると、黒い髪がすうっと銀髪に変わる。
「……キャナルか?」
「はい」
慧の問いに、キャナルが頷いた。
「わざわざキャナルが出てくるなんて、何かあったの?」
「何か、と言うか、私と神名が気になったことがあります」
どちらか片方ではなく、ふたりが気になったと聞いて、少し緊張する慧とミリィ。
「先程の、小麦色の肌の少女は何者ですか?」
「うん? クロの事? クロエ・フォン・アインツベルンって名前のクラスメイト。イリヤ…、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンっていう一緒にいた、顔がそっくりで色白の子と従妹同士って話だけど」
ミリィの説明に、キャナルは軽く曲げた人差し指を顎に添えて考え込み、そして。
「おそらくそれは、作り話ですね」
「「えっ!?」」
キャナルの発言にふたりが驚いた。
「彼女、クロエさんからは、私に…、いえ、むしろ魔族に似たものを感じました」
「「魔族!?」」

更に驚くふたり。
それ程親しいわけではないが、それでも曲がり形にもクラスメイト。魔族扱いするキャナルを、ミリィは恨みがましく睨む。
「……別に、彼女が魔族だと言っているわけではありませんよ。ただ、あの身体は本物の肉体ではないように思えます。それこそ魔族のように、精神を物質化している、そんな感じがするのです」
「精神の、物質化…」
予想外の事に、今度は戸惑うミリィ。
「で、結局どうすりゃいいんだ？」
「どうもしません。クロエさんが物質化した精神体というのは、あくまで私と神名の推測に過ぎませんから。
ただ、クロエさんがどのような存在かわからない今、もしもの時の為にも知っておいて貰いたかったのです」
「……そっか。心配してくれたんだ。
そうだね。知り合いを疑いたくはないけど、念のため注意しとくわ」

キャナルに感謝をし、でも、と思う。
（もしもクロがキャナルの言うとおりだったら、イリヤも何か関わってるって事？）
イリヤにまで疑念が浮かび、自己嫌悪するミリィだった。

奇襲

穂群原小5年1組の三時間目、水泳の授業。ミリィはプールサイドから、クロエの姿を眺めている。昨日キャナルから言われたことが気になり観察していたのだが。

（……どう見ても普通の子だよね？）

イリヤ達とキャッキャ楽しんでたり、水泳のタイムを測っている姿は、他の子達と何ら変わらない。……まあ、転校してくる少し前に「キス魔」事件を起こしたりしていたが、彼女の言を信じるのなら、ただの挨拶だったのだろう。たとえ祖父や大叔母が西洋出身で、チュッチュ挨拶してるわけでなかろうと、きっとそうに違いない。ミリィはそう心に言い聞かせていた。

「勝負よ、ミユ！」

「勝負？」

「負けた方はアイス奢りね」

なんだかイリヤが、美遊に勝負を挑んでいる。

「いいじゃない。わたしも参加させて！」

さらに件（くだん）のクロエが加わり。

「もちろんリナも参加するわよね？」

と、リナも巻き込まれていた。

（……平和ねー）

先日の魔族絡みの騒動が嘘のようである。このまま何事も起こらずに済めばいいと思いつつ、口には出さないでおく。ミリィとて、フラグというものは知っているのだ。

放課後。慧とともに校門に差しかかると、そこには。

「青川くん、星見さん」

「「黒神」さん」

昨日と全く同じシチュエーションで、神名が待ち構えていた。

「あの、キャナルがまた、お話があるって…」

「うん、そんな気がしてた」
　予想通りの理由に、ミリィは苦笑いを浮かべる。
「それじゃあ昨日と同じ…」
「ちょっと待って」
　そう言ってミリィが、キョロキョロと辺りを見渡す。
「どうしたミリィ？」
「いや、昨日と似たシチュエーションだから、また声をかけられるんじゃないかと思って」
「……マンガかよ」
　ミリィの行動に呆れる慧だった。

　公園に移動すると、神名は昨日と同じ様に辺りを確認してから、キャナルと瞬時に入れ代わる。
「なあ、最初見た時より、入れ代わるスピード上がってないか？」
「あ、言われてみれば」
　慧の疑問に相槌を打つミリィ。
「あの時は力の使いすぎで、強制的に戻りましたから。お互いが徐々に入れ代わる感じですね。
　昨日はまだ本調子ではなかったので、入れ代わりに少々時間がかかりました」
　そう言えば力を使いすぎた、とか言っていたと、あの時のことを振り返る慧。そして。
「ってか、毎日探索してただけで力を消費してんのに、昨日今日と入れ代わって大丈夫なのかよ？」
　新たに浮かんだ疑問を口にする。
「探索と言っても、ただ探し回っているわけではありません。［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］の波長を媒介にした、魔法…、こちらで言う魔術を使った探索です。レプリカを使用しているために、範囲を狭めないと精度が安定しないのが欠点ですが。
　最も昨日は神名に止められたので、探索には行ってません」

なるほど、と頷き、そして神名の意見は尤もと同意する慧。無茶も過ぎれば害にしかならない。もちろん無茶をしなければならない場面もあるだろうが、慧の考えでは今では無いと思っていた。
「えっと、わたしからもいいかな？」
「ええ、どうぞ」
「うん。ええと、その魔王の武器って、冬木市内にあるのは確実なの？」
ミリィは根本的な前提を聞いてくる。するとキャナルは少し困った表情になり言った。
「可能性が高い、としか言えませんね」
「どういうこと？」
「……本来なら、可能性が低いとするべきなのですが」
聞き返すミリィに、さらに返すキャナル。
「魔王の武器が現れたと想定される範囲が、こちらの予想よりも広いかも知れません。あくまでも推測に過ぎませんから。
また、こちらに現れた時期は時間の流れのズレを考慮しても、少なくとも１００年以上前、数百年前と思われます。その間に他の地へ移動されているかも知れません」
どちらも可能性としては当たり前の事。しかしそうなると、一つ疑問が残る。
「それじゃあ、それでも未だに可能性が高い理由はなんだ？」
「それは、魔族がこの地に居たことです。彼らの目的もまた、魔王の武器でしょうから。つまり確信が持てたのは一昨日の事、というわけです」
まさか魔族の存在が、可能性が確信に変わるきっかけというのも皮肉な話である。
「……うん、わかった。話があるのに色々聞いて、ごめんね？」
「いえ、私の用事も、貴方方に聞きたいことがあったからですので」
「聞きたいこと？」
ミリィと慧が聞き返す。
「はい。あの、どちらか三時間目の授業で、水泳を受けてませんか？

どちらも受けていなければ、それで話は終わりなのですが…」
六学年に、更にクラス分、２クラス同時でも分子は二。３０クラスで十五分の一、２４クラスでも十二分の一の確率である。しかし。
「あ、ウチのクラスがそうだったけど」
導入部の内容の通り、ミリィのクラス（5年1組）は水泳の授業を受けていた。
「そうですか。それではミリィさんにお伺いしたいのですが、授業中におかしな事は起きませんでしたか？」
「おかしな事？」
言われてミリィは少し考え込み。そして。
「そういえばイリヤ達の勝負の時、おかしいって言うか奇妙な感じだったわね」
「勝負、ですか」
「うん」
ミリィは頷き話を続ける。
「昨日の三人とリナって子が水泳で勝負したんだけど、飛び込んでから到着するまでの泳いでる姿を、見てないのよ」
「いや、さすがにミリィの勘違いじゃないか？」
そう思うのが普通だろう。だがミリィは首を横に振り。
「藤村先生と美々はストップウォッチ見てたし、クラスのみんなも遊んだり練習してたから気づかなかったかもしんないけど、わたしはクロを気にしてたから」
「なるほどな。でもだったら、どういうこった？」
答えの出ないふたりがキャナルを見る。
「そういう事、なんでしょうか…？」
「そういう事？」
ミリィが尋ねると、キャナルは一瞬言いあぐねながらも答えた。
「……実は三時間目にプールの方で、空間の歪みを感じたのです。けれどそれは十秒程度で収まりましたが」
「……イリヤ達全員、十一秒フラットだった」
藤村先生と美々が驚いている姿が印象に残っている。
「ならば、そうなんでしょう。おそらくその四名の方は、空間の歪みに

巻き込まれ、そして帰還したのだと思います」
「冗談、……じゃないよな？」
「冗談でするのには、突拍子もないでしょう？」
確かに突拍子が無さ過ぎる。そもそも、キャナルの存在自体が突拍子もないのだが。
「……ん？　どうした、ミリィ？」
黙って考え込んでいるミリィに気づいた慧が、声をかける。
その時のミリィは、リナについて考えを巡らせていた。
リナはミリィのクラスメイトで、同じクラスの女子の中でも、比較的会話を交わす間柄である。それは同時に、その程度の間柄ともいえる。
とはいえそんな彼女が、件（くだん）のクロエと共に空間の歪みに飲み込まれ、そして戻ってきたのだという。……それだけなら、ただ巻き込まれたで済むだろう。だが、戻ってきたらしきリナは、そんな事、おくびにも出さない。それどころか、態度はいつもと全く変わらないでいる。
なにが言いたいのかといえば、もしかしたらリナも関係者なのかも知れない、という事だ。
ミリィはそこの所をふたりに伝えた。
「成る程。確かに可能性はありますね」
「だが、それ以外は変わったところはないんだろ？」
キャナルは頷き、慧は、ミリィを慮ったのか、はたまたただの疑問か、半ば尋ねるような発言をする。しかし。
「……あ」
「……なんか、あるのか？」
聞き返す慧に、こくりと頷くミリィ。
「一昨日の調理実習の時なんだけどね？　わたしとリナが同じ班になったんだけど、クラス一騒がしい龍子をうちの班が引き取ることになったんだ。
それで、予想どおり騒がしく喚いてたんだけど、リナが何かぼそりと呟いたら、龍子が急に眠っちゃったのよ」

「何だ、それ」
「リナは、催眠術みたいなものって言ってたけど…」
「魔術、かも知れませんね」
　キャナルのセリフに、ビクリとなるミリィ。
「地水火風の四大元素を除いた術では、眠り、明かり、治癒等は、比較的初めの方で覚える、所謂初級魔術です。つまり」
「魔術を扱う奴なら、使えてもおかしくないって訳か」
「はい。しかし…」
　キャナルは少し考えるような表情を浮かべ、話を続ける。
「こちらの世界の［魔術師］と呼ばれる人達は、神秘の秘匿、つまり神秘を隠すのが常識だと、神名は言ってました。神秘が明らかになる程に神秘は薄れ、神秘を旨とする魔術は衰退していく、という事です。
　それを踏まえて考えると、そのリナという少女の行動は、魔術師としては些か配慮に欠けた…、はっきりと言えば軽率な行動に思われます」
　言われてみれば、確かにその通りである。
　……余談だが、この時盛大にくしゃみをした、ふたりの女性魔術師が居たとかどうとか。
「なあ、いっその事、そのリナってのに直接聞いてみたらどうだ？　ミリィと仲はいいんだろ？」
「仲がいいって言っても、穂群原（ホムショー）小の四神（三人）＋αやイリヤズ＋美遊みたいな、あそこまで仲良しって訳じゃないし、何よりリナ相手だと簡単にはぐらかされそうだから」
　慧の意見に、苦笑いで答えるミリィ。
「……まあ、な。リナって、あの色々噂になってる稲葉リナの事だろ？
　確かに一筋縄じゃいかねえか」
「……あの、噂ってどの様な？」
「一番有名なのは、［身体は子供、心は魔王］の稲葉リナ」
　キャナルの疑問に慧が答えると、ミリィが複雑な表情を浮かべる。その二つ名を付けたのも、クラスメイトだったからだ。
「他にも［ゴジラも跨いで通る稲葉リナ］、略して［ゴジまたリナ］と

か、［魔王の食べ残し］とか…」
「なにそれ、わたしも初めて聞いたんだけど」
　ミリィが目を丸くする。因みにリナが聞いていたら、「どうしてその二つ名を…」等と驚いていたに違いない。
「……何だか、あまり関わり合いにならない方がいい方みたいですね」
「いや、怒らせなきゃ別に、普通…の……。ううん、なんでもない」
　食欲魔少女っぷりや、スリッパを使った激しいツッコミを思い出し、口を噤むミリィだった。

「青川さん、星見さん、時間をとらせてしまい申し訳ありませんでした」
「いや、別に構わねえよ」
「わたし達も必要な情報を聞けたわけだし。Ｗｉｎ―Ｗｉｎってやつよ」
「ういん…？」
　少し思案顔になったキャナルだが、すぐに笑顔に変わる。
「ういんういんの意味はわかりませんが、あなた方の様な前向きな考え方は嫌いではありませんよ」
　その様なことを言われた二人は、少しばかり照れて視線を逸らす。
「それではまた」
　そう言って宿主である神名に入れ代わった、その直後。ほんの二日前に感じたあの気配。
　慧とミリィは左右に分かれて飛び退く。そのおり慧は、入れ代わった直後で反応の遅れた神名の手を引っ張り、抱きかかえるようにして倒れ込む。
「……ふむ。相変わらず勘は良いようですね」
そこに現れたのは、いつぞやのそれであった。
「やっぱりお前かっ!!」
　キッと睨み怒鳴るように言う慧。すると。
「あああああの、あああ青川くん!?　いいいつまで、その、抱きついて

…!?」
「あ、すまね」
テンパった神名に言われて、慧は慌てて身を引いた。ただその口調から、まったく他意が無いのは見てとれるのだが。
（この、一級フラグ建築士!!）
その様子を見ていたミリィが、心の中でそんな事を毒づいていたりする。
それはそんなミリィを見てニヤリと笑う。ミリィの、そのちょっとした嫉妬（負の感情）が気に入ったようだ。
「まったく、代わり端を襲うとは…！」
再び入れ代わり、すくりと立ち上がるキャナル。背負っていた鞄から［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］を取り出そうとするが。
「その様な隙を与えると、思っているのですか？」
気がつけば既に、キャナルの目の前に迫っていたそれ。その手をキャナルの首許に伸ばし…。
バシュ！　バシュ！　バシュ！
乾いた音が鳴り響き。
「ガアアアアッ!?」
それは伸ばしかけた腕をもう片方の腕で掴み、呻き声を上げた。その腕には三つの穴が開き、煙を上げている。
「こなくそっ！」
キャナルよりも先に行動を起こしていた慧が、鞄から黒鍵を取り出して刃を編み、それに斬りかかる。それは慌てて後ろに飛び退き、大きく距離をとる。そこへ。
バシュ！　バシュ！　バシュ！
再び響く、乾いた音。
「ガハァッ!?」
それも再び、短く呻き声を上げ、すうっと姿を消し。
バシュ！
「ガッ!?　まさかっ!!」
ミリィの背後に現れたはずのそれは、真正面を向いたミリィから銃

弾を受けた。
後ろに飛び退きながらミリィが言う。
「同じ手を食らうほど間抜けじゃないわよ、わたしは！」
そう。それが消えた直後に現れるのは、誰かの目の前か背後である。
慧は駆け込みながら斬りつけていたので、背後に出ても攻撃が当たらない可能性がある。
キャナルは既に［烈光の剣（ゴルンノヴァ）］を取り出し構えているので、反撃を食らう可能性がある。
必然的に、立ち止まった状態で攻撃をしていたミリィの後ろに現れた訳であったのだが。しかしミリィは、それが消えた瞬間に数歩前へ飛び出し、片足を軸にして半回転、それが現れた瞬間に引き金を引いたのだ。
そして更には。
「光よっ！」
「おりゃあああっ！」
驚き気をとられていたそれの目の前に、キャナルと慧は踏み込んでいた。
振り抜かれた二振りの剣。
「ぎひゃあああっ!!」
それは情けない声を上げて消えていった。
「……倒したのか？」
「いえ、深手を負わせることは出来ましたが、滅ぼすことは叶わなかったようです」
光の刃を消しながら、キャナルは答える。
「そうか…」
慧も黒鍵の刃を消し、ひとつため息を吐いた。そしてミリィに向き直り。
「それよりお前、射撃の腕凄かったんだな」
そう尋ねる。するとミリィ自身も驚いた顔をしていたが、急に不敵な笑みを浮かべ。

「フフフ。何しろわたしは、２０００の技を持つ女だからね！」
などと胸を張り、サムズアップをしながら言い放った。ハッキリ言おう。これはミリィの、口からでまかせである。銃の腕前には、彼女自身が驚いていたのだ。
そしてもちろん、親戚で幼馴染みでもある慧には全てお見通しであった。
「ふーん、そうか。それじゃあ、調理器具破壊は何番目の技なんだ？」
慧の問いかけに、ミリィの笑顔は引き攣り。
「慧の、ばかぁ！」
彼女は心の底から叫んだ。
（はぁ。まったく、締まりませんね）
キャナルは呆れつつも、苦笑いを浮かべながら暖かな目差しを向けるのだった。